

# 妙中パイル織物 株式会社

ものづくり技術

一般型

## 新型タイイングマシンの導入により 新分野への展開が可能な体制づくりを図る

事業  
内容

### 液晶パネル向けラビングクロスが主力 長年培ってきたノウハウが強み

1950年設立の同社は、和歌山県橋本市高野口町のパイル織物業界上位企業の一社として、パイル織（織り地または編み地の片面、または両面に毛羽などを織り出した織物）を製造および技術面から牽引してきた。

パイル織物製造の用途別では、産業資材用（ラビングクロス、ポアシート、ブラシ用モケット）をメインとして、車両用（鉄道、バス・自動車、飛行機等のシート）、インテリア用（椅子張り、カーテン、クッション、壁装）、衣料用（綿ベルベット、ジャガードベルベット、レーヨンシール、フェイク

ファー）と多岐にわたる。

近年は、主力製品である液晶パネル向けラビングクロス（液晶パネルの生産に欠かせない液晶分子を配向させる処理に用いられる布地）および化粧用パフの受注が増えている。

主力製品である液晶パネル向けラビングクロスは、製造できる企業は国内でも数社程度しかなく、同社がこれまで培ってきたノウハウを最大限活かした製品であり、参入障壁が高い製品でもある。

補助  
事業

### 産業資材用の製品開発に注力 ネックである製織準備作業の効率化

車両用、インテリア用、衣料用のパイル織物の受注が伸び悩む中、産業資材用パイル織物の引き合いは比較的増えている。この動向を踏まえ、同社では液晶パネル生産用ラビングクロス、化粧用パフ、自動車ボディ塗装研磨用パフ、家電用特殊モップ生地など、産業資材向け製品の製造に注力している。

産業資材用の製品開発では、化粧用パフに使用されるポリエステルフィラメントの50デニール（デニールは糸・繊維の太さの単位）から産業用マジックテープに使用される3000デニールまでの細い糸から太い糸まで幅広い種類の糸が使用される。商社などからは、比較的太い糸を使用した製品の相談が増えている。

しかしながら、太い糸を製織（糸から織物を作る）する場合、製織の前準備として手作業で糸同士を結ばなければ

ならず、人手が必要となる。そのため、新製品開発を進めていく際に躊躇することもあった。

そこで、今回の補助事業では、太い糸でも結ぶことのできる「新型のタイイングマシン」を導入し、製織準備作業の効率化を狙った。



妙中パイル織物 株式会社

代表取締役 妙中 清剛  
〒649-7206 橋本市高野口町向島193  
TEL: 0736-42-3170 FAX: 0736-43-2803  
URL: http://www.taenaka.com

〈業種〉毛織物製造  
〈設立〉1950年9月  
〈資本金〉10,000千円  
〈従業員〉58人

成果

### 糸の性質に合わせた独自セッティング 展示会出展で新製品の可能性を探る

今回導入した新型のタイイングマシンは、海外製であるため、日本製のものに比べると力が強く、糸の種類（太さや強度）に合わせて独自にセッティングを行わなければならない。機械操作の勘所を掴みつつあるものの、独自のセッティングを確立するまでには1年以上の時間をかけていく必要があるようだ。

太い糸同士の結び合わせは、試行しているところで具体的な製織に役立ったというわけではないが、これまでに多数の実績がある太さの糸同士の結び合わせは問題なくできている。実際に製織を行って、納品できた製品もある。今後は、やや高度な太い糸同士の結び合わせを難なくこなし、新たな引き合いにも対応していきたいと考えている。

営業面では、2017年5月にドイツで開催された産業資

材用の繊維製品の展示会「Techtextile2017」に初出展した。今回導入した新型タイイングマシンを有効利用できる産業用ブラシや面ファスナー、電子部品用パイル織物のサンプルなどを展示し、市場調査を進めている。

今後の  
展開

### 技術水準の引き上げを図る 新たな用途の開発を探る

今回、新型タイイングマシン導入したことにより、手作業であった製織準備作業をある程度自動化できたため、資材用の面ファスナー、産業用のブラシなどについてまとまった受注があっても対応できる体制は敷けている。今後は、国内・国外問わず、積極的に営業活動を行い、新たな引き合いを少しずつ増やしていく予定である。

品質面では、新規得意先・既存得意先に関わらず、要求水準は上がってきている。例えば化粧用パフであれば、粉

持ち、粉離れ、肌触りなどを厳しくその品質が問われる。できるだけ他社で対応が難しい加工ができるように、技術水準の引き上げを図りたいとしている。

取り巻く業界環境としては、以前より同業他社は少なくなり、業界全体の仕事量も少なくなってきた。これまでとは違った用途の開発を進めることで、新たな活路を見出していきたい。

